

令和6年度 農作物病害虫発生予察情報 発生予報 第7号（4月予報）

令和7年3月19日 秋田県病害虫防除所

- ◇今回の予報対象期間は4月を主とします。次回の発表は令和7年4月23日の予定です。
- ◇病害虫発生予察情報は秋田県公式ウェブサイトでご覧いただけます。
<https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/>
- ◇最新の農薬登録状況は、農林水産省ウェブサイト「農薬登録情報提供システム」で確認してください。<https://pesticide.maff.go.jp/>
- ◇病害虫発生予察情報の発表をお知らせするメールマガジンはこちらのウェブサイトでご登録いただけます。<https://www.e-komachi.jp/>
- ◇秋田県総合防除計画を策定しました。本計画は秋田県公式ウェブサイトでご覧いただけます。<https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/4233>



秋田県病害虫防除所
トップページ

I. 予報の要点

水 稲	<p>いもち病（苗いもち、苗の葉いもち）の発生量は平年並と予想されます。育苗施設周辺や施設内に稲わら・籾殻を置かず、種子消毒と育苗期のいもち病防除を必ず実施してください。</p> <p>ばか苗病ともみ枯細菌病は多いと予想されます。環境衛生と適切な種子予措、育苗管理を徹底してください。</p>
果 樹	<p>りんごでは、腐らん病の発生量が多いと予想されます。樹体検診を実施して、早期発見と適正な処置をしてください。</p> <p>なしでは、胴枯病の発生量がやや多いと予想されます。病枝、病患部は見つけ次第直ちに切り取って適切に処分してください。</p> <p>ぶどうでは、黒とう病の感染時期がやや早いと予想されます。前年に本病の発生が見られた園地では、休眠期に防除してください。</p>

Ⅱ. 主要病害虫の向こう 1 か月の予報

作目名	病害虫名	対象地域	発生・感染時期	発生・感染量	
				現況	予報
水 稲	いもち病 (苗いもち、苗の葉いもちを含む)	全県	—	—	平年並
	苗立枯病 (ピシウム菌)	全県	—	—	平年並
	(リゾープス菌)	全県	—	—	やや少ない
	ばか苗病	全県	—	—	やや多い
	もみ枯細菌病	全県	—	—	多い
	苗立枯細菌病	全県	—	—	平年並
りんご	褐条病	全県	—	—	平年並
	腐らん病	全県	—	やや多い	多い
	モニリア病 (葉ぐされ)	全県	やや早い	—	やや少ない
	黒星病	全県	やや早い	—	平年並
	ハダニ類 (リンゴハダニ)	全県	やや早い	平年並	平年並
なし (日本なし)	ハマキムシ類	全県	やや早い	—	平年並
	黒星病	県北部・県中央部	やや早い	—	やや少ない
	紅粒がんしゅ病	県北部・県中央部	—	—	平年並
	胴枯病	県北部・県中央部	—	—	やや多い
	ハダニ類 (リンゴハダニ)	県北部・県中央部	やや早い	平年並	平年並
ぶどう	ニセナシサビダニ	県北部・県中央部	やや早い	—	平年並
	黒とう病	県南部	やや早い	—	平年並

Ⅲ. 発生予報と防除対策

A 水稲

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1 いもち病（苗いもち、 苗の葉いもちを含む）	—	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ 前年の穂いもちの発生量から、越冬伝染源量はやや少ないと推定される（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 自家採種せず、県内の採種は産種子などを使用する。
- イ 育苗施設の周辺や施設内に稲わら・籾殻を置かない。
- ウ 種子消毒を行う。また、種子消毒の注意事項は、「3 ばか苗病」を参照する。
- エ 育苗期のいもち病防除は、次のいずれかの方法で必ず実施し、育苗施設から本田への伝染・発病苗の持ち込みを防ぐ。

① 播種時～播種14日後までにベンレート水和剤500倍液を箱当たり500mL、又は播種時～播種7日後頃に1,000倍液を箱当たり1Lかん注する。

② 緑化始期にビームゾル500倍液を箱当たり500mLかん注する。

- オ 種子消毒にタフブロック又はエコホープD Jを使用した場合は、防除効果を低下させるので、エ①の播種時処理は行わない。

カ ビームゾルは使用時期が遅れたり、低温時に使用すると葉先が黄化する薬害を生じる。

キ 本田の葉いもちを対象として床土混和处理又は播種時（覆土前）処理を行う箱施用剤は、苗いもち（苗の葉いもちを含む）に対する防除効果がないため、育苗期のいもち病防除（エの殺菌剤）を必ず組み合わせる。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
2 苗立枯病 (ピシウム菌)	—	平年並（前年よりやや多い）
(リゾープス菌)	—	やや少ない（前年並）
	—	やや多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（ピシウム菌（ /-）、リゾープス菌（ /+））。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 育苗施設を清掃する。また、育苗箱などは十分洗浄し、イチバンやケミクロンGで消毒する。
- イ 人工培土を使用する。
- ウ 育苗期間の温度管理と水管理を適正に行う。
- エ 次の薬剤で防除を行う。

使用時期	農薬名	使用量又は希釈倍数	散布液量(箱当たり)	ピシウム菌	フザリウム菌	リゾーパス菌	トリコデルマ菌	リゾクトニア菌	白絹病菌
播種前	オラクル粉剤	10～15g/箱	—	○					
	タチガレエースM粉剤	6～8g/箱	—	○	○				
	ナエファイン粉剤	6～8g/箱	—	○	○	○			
播種時	オラクル顆粒水和剤	4,000倍	500mL	○					
		8,000倍	1 L						
	ダコニール1000	500～1,000倍	500mL			○			
	ダコレート水和剤	400～600倍	500mL		○	○	○		
	タチガレエースM液剤	1,000倍	500mL	○	○				
			1 L						
	ナエファインフロアブル	1,000倍	500mL	○	○	○			
			1 L						
	ベンレート水和剤	500倍	500mL		○			○	
1,000倍			1 L						
ランマンフロアブル	1,000倍	500mL	○						
出芽後	タチガレエースM液剤	500倍	500mL	○	○				
		1,000倍							
	バリダシン液剤5	1,000倍						○	○
	ランマンフロアブル ¹⁾	1,000倍		○					

1) 使用時期は緑化始期までとする。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
3 ばか苗病	—	多い(前年並)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている(/+)。
- イ 前年の本田での発生量から、越冬伝染源量はやや多いと推定される(/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 自家採種せず、県内の採種ほ産種子などを使用する。
- イ 種子予措をする予定の作業施設やその周辺を清掃し、伝染源となる稲わら、粃殻、米ぬか、粉じんなどを除去する。
- ウ 種子消毒を行う。種子消毒の防除効果は、浸種水温10～15℃で高いことから、水温10℃以上が確保できる4月上旬頃を目安に浸種を開始する。
- エ 高濃度短時間浸漬及び低濃度長時間浸漬では、消毒効果の安定・向上を図るため、浸種開始後2日間は水のかけ流し、循環や交換をしない。
- オ 塗沫法及び湿粉衣法による消毒種子又は、消毒剤吹き付け・塗沫済み種子では、種子表面に付着した薬剤が浸種後に水に溶け出し、種子周囲の薬剤濃度が高くなった状態で消毒効果を発揮する。そのため、浸種開始後2日間は種子袋をゆすったり、水のかけ流し、循環や交換をしない。
- カ 複数の品種や来歴、防除方法の異なる種子を同じ容器で同時に浸種・催芽をしない。また、品種や防除方法が変わるごとに容器を十分に洗浄する。
- キ 消毒前の種子と消毒後の種子を同じパレットやシートなどに置かない。消毒後の種子を載せるパレットやシートなどは十分に洗浄した清潔なものを使用する。
- ク 周辺からの病原菌の侵入を防ぐため、浸種・催芽時は容器に蓋をする。

ケ 浸種時の水量は、種子 1 kg に対し水約 3.5 L とし、水温は 10～15℃ になるように努める。水温が低い場合は温水で調整する。浸種は水道水、井戸水を用いて水槽で行い、河川や湖沼の水は使用しない。

コ 浸種期間は浸種水温 10℃ で 6～8 日、14℃ で 6 日程度とし、安定した薬効を確保するために、水交換は 2～3 回とする。

サ 催芽は 30～32℃ で行う。

シ 循環式催芽器を使用した催芽は、発病が多くなる場合がある。

ス 出芽までの温度が低いと発病が多くなりやすいので、被覆資材などによる保温に努める。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
4 もみ枯細菌病	—	多い（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア 向こう 1 か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ 前年の発生量から、越冬伝染源量はやや多いと推定される（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 育苗施設を清掃する。また、育苗箱などは十分洗浄し、ケミクロン G など消毒する。

イ 循環式催芽器を使用した催芽は、発病が多くなる場合がある。

ウ 所定の播種量を守り、厚播きはしない。

エ 出芽温度は 32℃ を超えないようにし、被覆期間を過剰に長くしない。また、出芽後の再被覆は行わない。

オ 緑化期以降はハウスの開閉をこまめに行い、25℃ 以上にならないようにする。また、通風を良くし、過湿にしない。

カ 過剰なかん水は被害を拡大させるので注意する。

キ 種子消毒は本病に効果のある薬剤を使用し、「3 ばか苗病」の防除上注意すべき事項を参照する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
5 苗立枯細菌病	—	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア 向こう 1 か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ 前年の発生量から、越冬伝染源量はやや少ないと推定される（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア 「4 もみ枯細菌病」を参照する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
6 褐条病	—	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア 向こう 1 か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ 前年の発生量から、越冬伝染源量はやや少ないと推定される（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 循環式催芽器を使用した催芽は、発病が多くなる場合がある。
- イ 出芽温度は30℃を超えないようにする。
- ウ 緑化期以降は通風を良くし高温、過湿にならないようにする。
- エ 種子消毒は本病に効果のある薬剤を使用し、「3 ばか苗病」の防除上注意すべき事項を参照する。

B りんご

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1 腐らん病	—	多い(前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている(/+)。
- イ 3月1～2半旬の巡回調査における発病樹率は1.3%(平年1.7%)で平年並、発病地点率は30.0%(平年19.8%)で高かった(/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 樹体の検診を数回実施し、早期発見と適正な処置に努める。
- イ 雪害を受けた部位は早めに整形し、伐採した枝は園内に放置せず焼却するか園外に搬出する。
- ウ 雪害の整形部及び剪定跡にはトップジンMペースト又はバッチレート塗布する。
- エ 枝腐らんの剪去跡、胴腐らんの病斑の削り取り跡は状況に応じて、以下の方法で処置する。
 - ① 枝腐らんは健全部を含めて剪去し、胴腐らんは健全部を含め紡すい状に大きく削り取り、トップジンMペースト又はバッチレートを塗布する。なお、剪去した枝腐らん、病斑の削り屑は放置せず焼却するか園外に搬出して処分する。
 - ② トップジンMオイルペーストは成木の胴腐らんの削り取り跡のみに使用し、枝腐らんの剪去跡又は枝の剪定跡には使用しない(薬害防止)。
 - ③ 病斑部が広範囲で削り取りが実施できない場合は「泥まき」を実施する。「泥まき」は病斑部の表面を軽く削り、水気を含ませた畑土で病斑部の削り取り部分よりやや広めに覆い、その上からビニールなどを巻き、保湿する。一年後には取り除いて治癒状況を調べ、必要によっては再度行う。
- オ 発芽前に石灰硫黄合剤、トップジンM水和剤、ベンレート水和剤のいずれかを散布する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
2 モニリア病(葉ぐされ)	やや早い(—)	やや少ない(前年並)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている(—/±)。
- イ かつの果樹センター(鹿角市)における3月17日現在のふじの予測発芽日は、4月10日(平年差+3日)、果樹試験場(横手市)における3月17日現在のふじの予測発芽日は、3月30日(平年差-3日)である(±/)。
- ウ 前年の実ぐされ発生量から、越冬伝染源量はやや少ないと推定される(/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア ひこばえは、伝染源となるため剪去する。

- イ 4月によく見られる葉ぐされは見つけ次第摘み取り、焼却又は土中に埋める。
- ウ 例年発病が見られる園地では、芽出し10日後にストライド顆粒水和剤、デランフロアブル、パスポート顆粒水和剤のいずれかを散布する。
- エ 葉ぐされの防除は次のいずれかで実施する。
- ① 葉ぐされの発生が多い場合は、葉ぐされ発生盛期（開花1週間前～開花直前）に治療防除剤としてトップジンM水和剤（RACコード：1）を散布する。本剤に展着剤のニーズを加用すると効果が高まる。
 - ② 葉ぐされの発生が少ない場合は、治療防除剤として開花直前にアンビルフロアブル（RACコード：3）、オンリーワンフロアブル（同：3）、サンリット水和剤（同：3）、インダーフロアブル（同：3）、フルーツセイバー（同：7）、ネクスターフロアブル（同：7）、カナメフロアブル（同：7）のいずれかを散布する。

病虫害名	予報内容	
	感染時期	感染量
3 黒星病	やや早い（-）	平年並（-）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（-/±）。
- イ かつの果樹センター（鹿角市）における3月17日現在のふじの予測発芽日は、4月10日（平年差+3日）、果樹試験場（横手市）における3月17日現在のふじの予測発芽日は、3月30日（平年差-3日）である（±/ ）。
- ウ 前年の発生量から、越冬伝染源量は平年並と推定される（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 芽出し10日後にストライド顆粒水和剤、デランフロアブル、パスポート顆粒水和剤のいずれかを散布する。
- イ 開花直前と落花直後の薬剤は以下の点に注意して選択する。
- ① 前年に黒星病の発生が無かった園地では開花直前にオンリーワンフロアブル（RACコード：3）など、落花直後にアンビルフロアブル（同：3）などを、保護殺菌剤（チオノックフロアブル、デランフロアブル、ジマンダイセン水和剤など）に加用して散布する。
 - ② 前年に黒星病が発生した園地では開花直前にカナメフロアブル（RACコード：7）など、落花直後にユニックス顆粒水和剤47（同：9）又はミギワ20フロアブル（同：52）を保護殺菌剤に加用して散布する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
4 ハダニ類（リンゴハダニ）	やや早い（-）	平年並（-）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている（-/ ）。
- イ 3月1～2半旬の巡回調査における越冬卵の発生短果枝率は0%（平年0%）、発生地点率は0%（平年0%）でいずれも平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 芽出し前にスプレーオイル、トモノールS、ハーベストオイルの50倍液のいずれかを散布する。
- イ 芽出し前の防除が実施できない園地は、芽出し10日後までに上記アの薬剤の100倍液のいずれかを散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5 ハマキムシ類	やや早い (－)	平年並 (－)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている (－/±)。
- イ かつの果樹センター (鹿角市) における3月17日現在のふじの予測発芽日は、4月10日 (平年差+3日)、果樹試験場 (横手市) における3月17日現在のふじの予測発芽日は、3月30日 (平年差-3日) である (±/)。
- ウ 前年の発生量から、越冬量は平年並と推定される (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 開花直前又は落花直後に I G R 剤 (R A C コード : 15、18)、B T 剤 (同 : 11A)、ジアミド系剤 (同 : 28) のいずれかを散布する。特に、ミダレカクモンハマキが多く開花期間中に食害が目立つ園地では、落花直後の散布を必ず実施し、散布時期が遅れないように注意する。
- イ 訪花昆虫を保護するため、開花1週間前から落花直後の訪花昆虫活動期やミツバチ巣箱設置期間は、訪花昆虫に影響のある殺虫剤 (上記ア以外の殺虫剤) を散布しない。

C なし (日本なし)

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
1 黒星病	やや早い (－)	やや少ない (－)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (－/±)。
- イ 果樹試験場 (潟上市) における3月17日現在の幸水の予測発芽日は4月4日 (平年差±0日) である (±/)。
- ウ 前年9月の発生量から、越冬量はやや少ないと推定される (/－)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 落葉は一次伝染源となるので、園内に残っている場合は、発芽前までに集めて土中深く埋めるなど適切に処理する。
- イ 芽りん片から芽基部への感染防止のため、発芽前にアルタベールフロアブル又は石灰硫黄合剤を散布する。
- ウ 落葉からの感染防止のため、発芽2週間後に保護殺菌剤のチオノックフロアブル、トレノックフロアブル、ベルコート水和剤のいずれかを散布する。前年に黒星病の発生した園地では、これらの保護殺菌剤に S D H I 剤 (R A C コード : 7) のカナメフロアブル、ネクスターフロアブル、フルーツセイバーなどを加用する。
- エ 開花直前の防除は、保護殺菌剤に D M I 剤 (R A C コード : 3)、Q o I 剤 (同 : 11)、S D H I 剤 (同 : 7)、D H O D H I 剤 (同 : 52) のいずれかを加用する。ただし、前年に黒星病の発生した園地で D M I 剤を使用する場合は、本病に効果の高いスコア顆粒水和剤を2,000倍で加用する。
- オ 耐性菌の出現を回避するため、R A C コードが3、11、7、52の剤は年間2回以内の使用とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2 紅粒がんしゅ病	—	平年並 (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている (/±)。
- イ 前年11月の発生量から、越冬伝染源量は平年並と推定される (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 4月は剪定痕が最も多い時期であり、園地に伝染源があると降雨により感染するため、病枝、病患部は見つけ次第直ちに削り取って適切に処分する。
- イ 剪定した枝は伝染源となる可能性があるため、園内に置かず、直ちに適切に処分する。
- ウ 発病部の切り戻しや削り取りの跡にはトップジンMペーストの原液を塗布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3 胴枯病	—	やや多い (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている (/±)。
- イ 前年11月の発生量から、越冬伝染源量はやや多いと推定される (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 耕種的防除は、「2 紅粒がんしゅ病」の項を参照する。
- イ 発病部の切り戻しや削り取りの跡にはトップジンMペースト又はバッチレートの原液を塗布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4 ハダニ類 (リンゴハダニ)	やや早い (—)	平年並 (—)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高いと予報されている (—/)。
- イ 3月の巡回調査における越冬卵の発生短果枝率は0% (平年0%)、発生地点率は0% (平年0%) でいずれも平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 前年秋期に発生が見られた園地や越冬卵が見られる園地では、発芽前にアルタベールフロアブル又はハーベストオイルを散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5 ニセナシサビダニ	やや早い (—)	平年並 (—)

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (—/±)。
- イ 果樹試験場 (潟上市) における3月17日現在の幸水の予測発芽日は4月4日 (平年差±0日) である (±/)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 発芽前に石灰硫黄合剤を散布する。
- イ 前年発生が確認された園地では、発芽2週間後～新梢伸長初期にコテツフロアブルを散布する。
ただし、コテツフロアブルはミツバチなどへ悪影響があるため、訪花昆虫を利用する園地では使用しない。

6 その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	感染量（発生量）		防除上注意すべき事項
		現況	予報	
赤星病	やや早い	－	平年並	黒星病との同時防除に努める。

D ぶどう

病害虫名	予報内容	
	感染時期	感染量
1 黒とう病	やや早い（－）	平年並（－）

(1) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（－/±）。
- イ 前年7月の発生量から、越冬伝染源量は平年並と推定される（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア 雨滴で伝染するため、伝染源となる前年の被害枝（結果母枝）や巻きひげは降雨前に切り取って処分する。
- イ 前年に本病の発生が見られた園地では、休眠期にデランフロアブル、ベンレート水和剤、パスポート顆粒水和剤のいずれかを散布する。
- ウ 休眠期の散布は芽の状況をよく確認し、遅れないように実施する。
- エ シャインマスカットなどの欧州系品種やスチューベンは発生が多いので、休眠期の防除を徹底する。特に、若木は新梢の被害が大きくなりやすいので注意する。

IV. 気象予報

令和7年3月13日仙台管区气象台発表 東北地方1か月予報（3月15日～4月14日）

(1) 予報のポイント

- ・暖かい空気に覆われやすい時期があるため向こう1か月の気温は高く、特に、2週目はかなり高くなる可能性があります。また、1週目の気温は寒気の影響で低いため、期間の前半は気温の変動が大きいです。

(2) 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（東北日本海側）

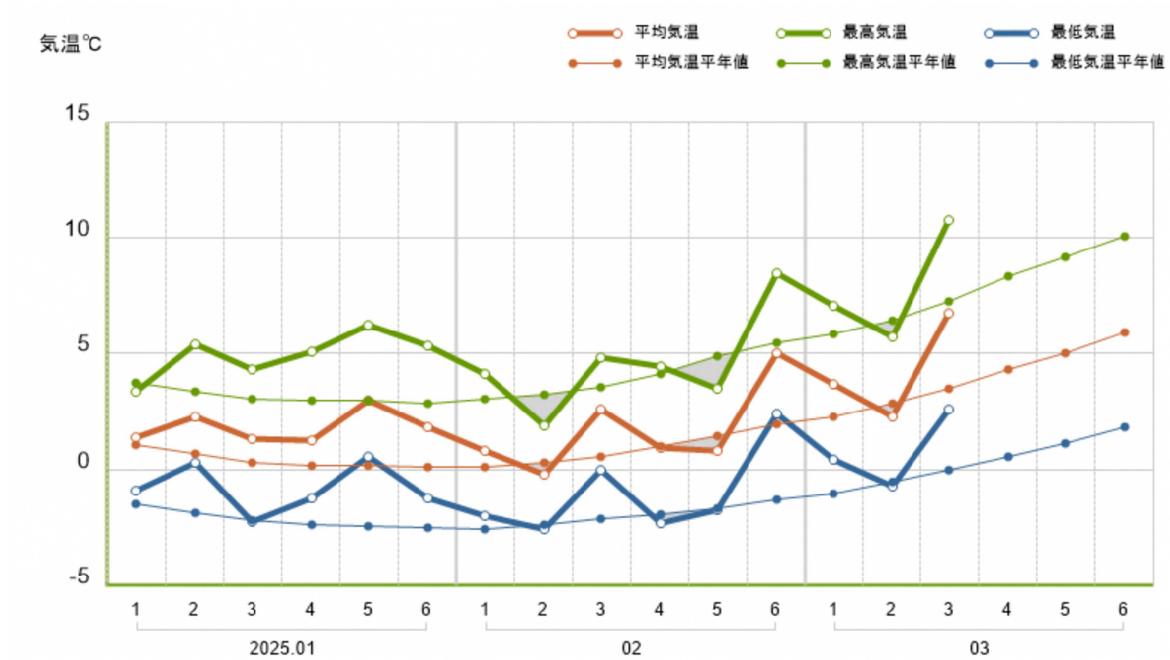
	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	20%	30%	50%
降 水 量	30%	30%	40%
日 照 時 間	40%	30%	30%

(3) 気温経過の各階級の確率（東北日本海側）

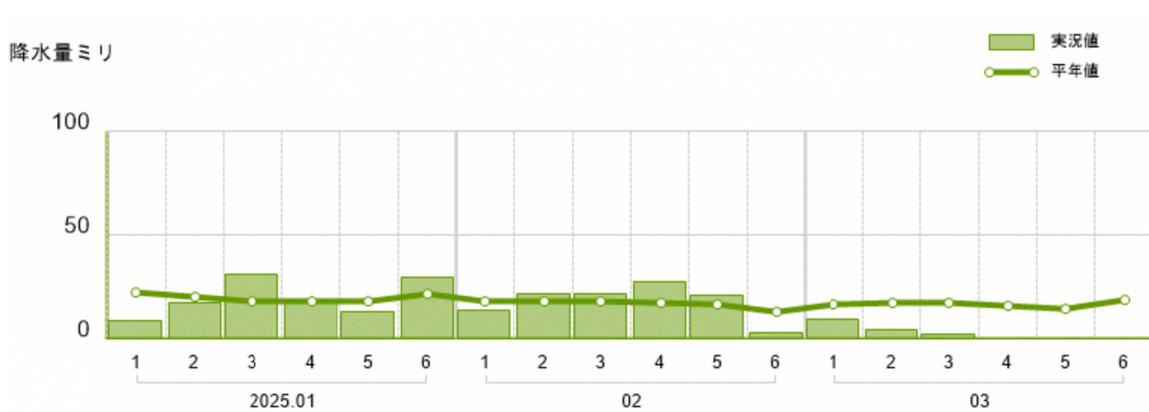
	低い	平年並	高い
3/15～3/21（1週目）	50%	40%	10%
3/22～3/28（2週目）	10%	20%	70%
3/29～4/11（3～4週目）	20%	30%	50%

V. 気象データ (秋田市、1月1半旬～3月3半旬 秋田県農業気象システムより)

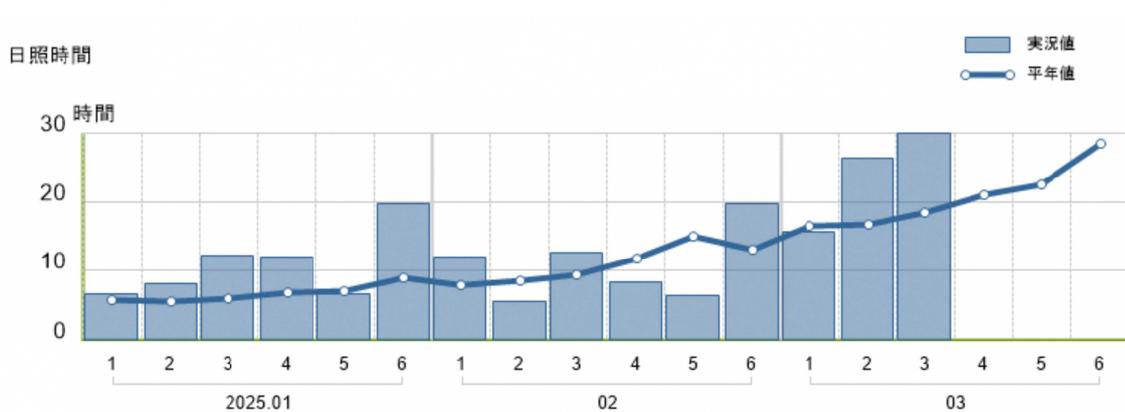
気温の推移



降水量の推移



日照時間の推移



VI. 用語の説明

発生時期

平年の発生日からの差を5段階評価で予測します。

日数	~-6	-5	-4	-3	-2	-1	平年 発生日	+1	+2	+3	+4	+5	+6~
評価	早い	やや早い		平年並				やや遅い		遅い			

発生量

発生密度の平年値からの差を5段階評価で予測します。密度のばらつきの差で示されるので、毎年発生密度が大きく変化する病害虫では、平年値からよほど大きくずれないと「多い」や「少ない」の評価にはなりません。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多い」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少ない」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

			平年値 ↓			
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少ない	やや少ない	平年並		やや多い	多い

予報内容の「-」

予報内容の発生時期や発生量の「-」（ハイフン）は、予察対象の病害虫が既に発生している、または、発生時期や発生量が不明なことを示します。

予報の根拠

予報の根拠に示している（ / ）は予察の要因で、（発生時期/発生量）を表しています。

発生時期の根拠の記号は「+」（プラス）が遅くなる要素、「-」（マイナス）が早くなる要素、「±」（プラスマイナス）はどちらともいえない要素を示しています。発生量の根拠の記号は「+」（プラス）が多くなる要素、「-」（マイナス）が少なくなる要素、「±」（プラスマイナス）はどちらともいえない要素を示しています。「空欄」は予報の根拠に関係しないことを示します。

気象予報

出現が見込まれる確率予報は、高い（多い）確率が50%以上の場合は「高い（多い）」、低い（少ない）確率が50%以上の場合は「低い（少ない）」となります。低い（少ない）確率が20%で平年並と高い（多い）確率がそれぞれ40%の場合は「平年並か

出現確率(低い(少ない):平年並:高い(多い))	解説
高い(多い)確率が50%以上 (20:40:40)	高い(多い) 平年並か高い(多い)
平年並の確率が50%以上 (40:30:30) (30:40:30) (30:30:40)	平年並 ほぼ平年並
(40:40:20)	平年並か低い(少ない)
低い(少ない)確率が50%以上	低い(少ない)

高い（多い）」、低い（少ない）と平年並が40%で高い（多い）が20%の場合は「平年並か低い（少ない）」となります。また、それぞれの確率が30~40%の場合は「ほぼ平年並」となります。

半旬のとり方

ここで扱われる「半旬」とは暦日半旬のことで、毎月1日から5日ごとに区切った期間となります。1半旬は1日から5日まで、2半旬は6日から10日までであり、以降6半旬まで5日ごとに該当する期間を指します。

水稲育苗終了後に野菜類や花き類を作付けする場合の注意

水稲育苗終了後に野菜類や花き類を作付けする場合は、育苗箱の下に不透水性無孔シートを敷いて、育苗期に施用した農薬をハウス内土壌に浸透させないようにしてください。

薬剤を移植前～移植当日に処理する場合は、育苗施設外で使用してください。

詳細は、令和7年度版秋田県農作物病害虫・雑草防除基準を参照してください。

農薬の適正使用・管理の徹底を！

農薬使用にあたっては、十分な注意のうえ、安全かつ適正に使用してください。

- 安全使用の基本事項
 - ・ 農薬の使用基準を遵守する。
 - ・ 病害虫の発生状況を把握し、必要最小限の農薬を使用する。
 - ・ 防除履歴を必ず記録する。
- 農薬使用上の注意
 - ・ 農薬の散布時には周辺作物に飛散（ドリフト）させないようにする。
 - ・ 家畜や蜜蜂などに影響のある農薬を使用する場合は、地域内の畜産農家及び養蜂業者と緊密に連携し、散布日時や散布地域、使用農薬の種類などを散布前に確実に周知する。
 - ・ 農薬散布後は散布器具の洗浄を徹底する。
 - ・ 特に、土壌くん蒸剤は使用上の注意事項を遵守する。
 - ・ 農薬散布作業にあたっては、装備と体調を万全にする。
- 農薬取扱い上の注意
 - ・ 農薬は保管庫に入れ、施錠して保管する。
 - ・ 農薬を他の容器（清涼飲料水の容器など）へ移しかえて保管しない。また、食品と一緒に保管しない。

問合せ先

秋田県病害虫防除所	TEL 018-881-3660	秋田県果樹試験場	TEL 0182-25-4224
秋田県農業試験場	TEL 018-881-3326	かづの果樹センター	TEL 0186-25-3231
		天王分場チーム	TEL 018-878-2251